

東館者在焉。然西十二村郷亦称黒川乎如此。則彼大川水脈有黒河川名者、益親矣、太守父子居可有東西者、至徳紀弁焉。

### 三、慶長十六年（一六一一）の地汙り洪水

東京大学で編集している、権威ある理科年表などをみると、古くは会津地方にも、しばしば、相当大的な地震があったようにみえている。近年も新潟地震の餘波が激しかったが、慶長十六年八月二十一日に起った地震は、どうも会津で起ったものとしては最も大きかったのではないかと思われる。柳津の舞台が崩れおち、塔寺の観音堂、喜多方市慶徳町の新宮拜殿が倒れたと、いろいろな記録にみえている。会津旧事雑考には「八月二十一日辰刻に大地震があつて、会津川下流が山崩れで壅塞し、河水が氾濫して会津四郡を浸そうとした。時の藩主蒲生氏は再封の秀行であつたが、重臣の岡半兵衛、町野左近等に命じて下流を掘らせ、湛水は三日で通じた。しかし低湿地で余り水が湛えて山崎湖ができた。だんだん水が涸れて、寛永末年（一六四三頃）、大体耕作ができるようになった。」（原文を意訳）この地震による死者は三、七〇〇名ともある。

耶麻郡誌の変災編には、「この山崎湖が東西三五町余、南北二〇町余氾濫してでき、次の加藤氏の時下流を決して、水勢が漸く半減したが、寛永八年（一六三一）九月の洪水で再び壅塞して水を湛えた。保科氏の時、寛永の頃（一六六一〜一六七二）なお湖があつたがだんだん掘って水道をもとに復した。」と書いてある。山崎新湖とも呼ばれていた。その際の際の山崩れの場所は明らかでないが、この付近が地汙りの起り易いことは、現在も断続的に起っているで知れる。降雨による洪水のことはみえないが、旧暦を現在に換算してみると、台風期でもあり、地震ともなつて大地汙りが起つて、山崎の峽隘を堰きとめたものと思われる。

青津の大小二つの前方後円墳が水に浸つて、山麓より大小二匹の水に浮ぶ亀の形にみえ、大亀甲館・小亀甲館